他者の向社会性への期待と未来思考能力の発達が幼児の分配行動に与える影響

○熊木悠人¹・森口祐介²・明和政子²

(¹福岡教育大学教育学部・²京都大学大学院教育学研究科)

キーワード：幼児、分配行動、未来思考

Expectation of Future Interaction with Recipients Affects Resource Allocation in Preschoolers

Yuto KUMAKI¹, Yusuke MORIGUCHI¹ and Masako MYOWA-YAMAKOSHI²

(¹Faculty of Education, Univ. of Teacher Education Fukuoka, ²Graduate School of Education, Kyoto Univ.)

Key Words: Preschooler, Resource allocation, Future-thinking

目 的

友人に対してそうでない他者に対してよりも多く資源を分配するというような、相手との社会的関係性に応じた選択的な資源の分配は、5歳頃から見られるようになることが知られている(e.g., Moore, 2009)。このような選択的分配は、自分に対して向社会的で返報が期待できる相手に資源を分配し、向社会性が期待できない相手には分配しないという傾向から生じている可能性が議論されている。そこで、本研究の実験1では、3.5-4歳および5-6歳の幼児を対象に、1) 参加児自身に対する相手の分配行動を予想し、2) その後、参加児自身が分配を行うという手続きによって、相手の向社会性への期待が幼児の分配行動に与える影響とその発達の変化を調べた。

選択的分配が返報など未来の相手との関わりを見据えた行動であると考えれば、その獲得には未来思考の能力が関わっていると考えられる。そこで実験2では、5-6歳児を対象に資源の選択的分配と未来思考能力との発達の関連を調べた。未来思考能力については、未来に起こりうる出来事を想起する能力であるメンタルタイムトラベルと未来の大きな利益のために目の前の小さな利益を我慢する能力である満足の遅延の二つに着目した。

方 法

実験1：3.5-4歳児群 21名(44-59か月、平均51.9か月)、5-6歳児群 27名(60-79か月、平均70.3か月)の計48名が実験に参加した。分配課題として、1) よく一緒に遊ぶクラスメイト、2) 一緒に遊ぶことが少ないクラスメイト、3) 見知らぬ児の三者を相手として、2つの選択肢の中からシールの分配方略を選ぶ課題を行った。課題は、(自分がもらえるシールの数、相手がもらえるシールの数)が(1,1)と(1,0)の選択肢から一方を選択する Prosocial game、(1,1)と(2,0)の選択肢から一方を選択する Sharing game の2種類であった。はじめに、参加児は相手が選択する立場であった場合、相手はどちらの分配方略を選択するか予想した(相手質問)。その後、参加児自身が2つの選択肢のどちらにするかを選んだ(分配行動)。両課題とも、3者の分配相手に対してそれぞれ2試行ずつ、計6試行が行われた。

実験2：5-6歳児 31名(44-59か月、平均51.9か月)が実験に参加した。よく一緒に遊ぶクラスメイト、一緒に遊ぶことが少ないクラスメイトの二者を分配相手として Prosocial game を行った。実験1と同様、参加児は相手がどちらの分配方略を選択するか予想し、その後、自身の分配方略を選択した。二者の分配相手に対してそれぞれ4試行ずつ、計8試行を行った。さらに、未来思考の課題としてメンタルタイムトラベルおよび満足の遅延の二課題を行った。

結 果

実験1：Prosocial game, Sharing game のそれぞれにおいて、年齢群、分配相手、相手質問での予想、およびそれらの一次交互作用が参加児自身の分配行動に与える影響について、一般化線形混合モデル(GLMM)を用いて検討した。その結果、Prosocial game では年齢群および年齢群と相手質問の交互作用が、Sharing game では年齢群、分配相手、および年齢群と相手質問の交互作用が分配行動を予測した。交互作用についての下位検定の結果、Prosocial game, Sharing game 双方において3.5-4歳児群では相手質問での予想と分配行動との間の関連は見られず、他方、5-6歳児群では相手質問において(1,1)を選ぶと予想した相手に対しては参加児自身も(1,1)を選ぶ割合が高かった。

実験2：分配相手、相手質問での予想、メンタルタイムトラベル、満足の遅延とそれらの一次交互作用が参加児自身の分配行動に与える影響について GLMM を用いて検討した。その結果、分配相手、相手質問での予想の他、分配相手とメンタルタイムトラベルの交互作用が有意な予測要因であった。下位検定の結果、分配相手がよく一緒に遊ぶクラスメイトのときはメンタルタイムトラベルの成績が良いほど(1,1)を選ぶ割合が高かった。他方、一緒に遊ぶことが少ないクラスメイトが相手であったときには、メンタルタイムトラベルの成績が良いほど(1,1)を選ぶ割合が低かった。

考 察

実験1, 2を通じて、5-6歳児は自分に向社会的だと期待できる相手に対し選択的に資源を分配することが示された。また、実験1において3.5-4歳児ではこのような傾向が見られなかったことから、相手の向社会性への期待に基づく選択的分配は5歳頃に獲得されると考えられた。

実験2より、メンタルタイムトラベルの能力が高いほど相手との社会的関係性に応じた選択的分配を行う傾向が強くなることが示された。これは、メンタルタイムトラベルの発達によって、分配相手との未来の関わりを想像して分配方略を決めるようになるためであると考えられた。

引用文献

Moore, C. (2009). Fairness in children's resource allocation depends on the recipient. *Psychological Science*, 20, 944-948.

謝辞

本研究は、文部科学省科学研究費補助金(#24119005、代表：明和政子)および前川財団家庭・地域社会教育助成事業(2015-2017、代表：明和政子、熊木悠人)の助成を受けた。